

ドコン、と音を立てて出てきた青い缶にはしかし、見本のようにキャラクターの絵は描かれていなかった。

男の子は「これ、ちがう」と言っつて、頬を膨らませ、その場で激しく足踏みをした。

「なにがちがうの？」

母親は男の子の目をのぞきこむ。

「これ、ちがう」

目に涙をいっぱいためている。彼の額に、透明の汗の粒が五月の光を受けて、きらきらと光っていた。

母親は男の子を自販機の脇に寄せ、なぜキャラクターの絵が描かれた缶が出てこなかったのかを、想像と嘘を交えて切々と語っていた。

最後に「わかるわよね、カイトはもうすぐお兄ちゃんになるんだもの」と母親に諭されると、男の子は大きな目をしばたかせ、ひとつ大きくなずいた。

凜子は、コインをさがすことをあきらめ、千円札一枚を取り出す。さつそく缶を開けて、ジュースを飲みはじめている男の子を横目に、お札を機械¹

に差し込んだ。

もう少し、この子と話がしたい。もう少しだけ触れ合っていたい。

そう願う凧子のもとに、天使が降りた。

「ねえ、ぼくが押してあげようか？」

これ、と母親が小声で注意する。

「押してくれるの？」

いつもよりも一オクターブ高い声が出た。

うん、と言って、カイトはその場でジャンプする。

凧子が欲しかったのは烏龍茶で、それはカイトが背伸びをすればなんとか手の届く、三段目にあった。

「これにする」

凧子は静かに言った。気がつくのと、一番上の段のまんなかにある「いちごオーレ」を指さしていた。

男の子は自販機に平行に立ち、両手を広げた。

凧子は彼を再びゆっくりと抱き上げた。

母親が影に移動し少し離れたのを見計らって、凧子は男の子の胸から首のあたりにそつと手をあてた。熱くちいさな胸からは、ドクドクと音が聞こ

えてきそうだった。やわらかい関節やきめの細かい皮膚が、凧子の腕に触れる。

「押すよ」

「うん、お願い」

凧子は、温かくやわらかなこどもの体の感触を味わったあと、ゆっくりとカイトを地面におろした。

一分足らずの時間ではあったが、凧子には永遠にも感じられる幸福な時間だった。

とつてあげる、とカイトが言つて、ちいさな手を取り出し口に差し込んだ。

カイトは得意げな笑顔を浮かべて、凧子にジュースを渡す。ありがとう、と凧子は彼の手を自分の手で包みながら言つた。

「ねえ、女の子だからピンクにしたの？」

カイトは、いちごオーレの缶と凧子を交互に見ながら尋ねた。

「いちごが好きだからこれにしたの」

「ふうん」

凧子の一番嫌いな果物は、いちごだった。それでも、彼に触れたかった。彼を抱き上げてみたか³

った。そのため、いちごの果汁の入ったジュースを口にする事など、たやすいことだった。

「さあ、帰ろう」

母親の右手はこどもの手をにぎり、左手は彼女の大きなおなかに軽く添えられていた。

凜子とはつさに、彼女の爪を見た。きれいに手入れされ、シンプルな装飾まで施してある。丁寧に塗られた桜色の爪が、きらきらと光る。失礼します、と凜子にはほほ笑む顔には自然なメイクが施され、やわらかそうな髪には軽くカラーリングがしてあった。

今風の妊婦。

凜子の頭に、目の前の女性を形容するのにぴつたりなことばが浮かんだ。

カイトが凜子に手を振る。親子は歩いて来たようだが、ここから佑介の実家までは、けっこうな距離があるはずだ。

佑介の実家のあたりを散策するという計画がいま、崩れかけようとしている。佑介の姿を見つめる前に、佑介の妻と息子に出会ってしまった。

いままで凜子のなかで、ピンと張り詰めていた

糸がふつりと切れてしまった。全身の力が抜けてゆく。

カイトがこちらを見て、まだ手を振っている。凧子は力なく、手を上げる。

「おうちまでダツシユだ」

凧子はカイトの声を聞くと、導かれるように空き地を離れ道路まで出て、彼に見える場所まで移動した。

カイトは駆け出さずに、ジュースの缶に口をつけながら、ひよろひよると安定しない足どりで歩いている。

凧子は親子のうしろ姿を見ながら、ただ茫然と立ち尽くしていた。

ついさきほど、自分の前で繰り広げられた親子のふれあいの一部始終を、凧子は頭の中で冷静に整理しはじめた。

佑介の妻は凧子と同じくらいの年恰好で、妊婦であることを除けば、自分と同じようなどこにもいる平凡な女性に見えた。

田舎に暮らしているからといって、おしやれに手を抜いているわけでもなければ、夫の家の苦勞

を背負っている風にも見えなかった。

出産を控えた女性が皆そうであるように、彼女もまた、しあわせいっぱい笑顔を浮かべ、自分のおなかに手をあてながら、すでに産み落としたもうひとつの命を、穏やかな眼差しで見つめていた。

凜子の心の中で、確信していたものが音を立てて、次々と崩れていった。

佑介のこどもが男の子であれば、佑介や彼の父親の名前を一字とり「介」の文字が入った名前をつけるのではなかったか。しかし目のくりくりした愛くるしい少年は、カイトと呼ばれていた。

佑介の妻は、それがあたり前のように髪を栗色に染め、爪にはきちんとマニキュアを塗っていた。VネックのTシャツを着て、雪のように白い胸元には、散りばめられたラメが輝いていた。肌は透き通り、頬は桃色に染まり、唇は十分に潤っていた。

車もひともめつたに通らない道をまっすぐに進む親子が、ふいに左に折れるのが見えた。この空き地から五十メートルも離れていない場所だ。

「おかしい」

ひとり呟いて、首をかしげた。

佑介の実家は、この道とは逆方向の坂道をまっすぐにのぼった先にある。

ふたりのあとをつけてみようとして、車に乗り込む。自分のとっさの行動に、凜子は彼らを追いかけているのではない、これはドライブだ、と理由をつけた。

親子が向かう方向へ車を進めると、新築の家が三軒並んでいるのが見えた。それぞれ形や大きさは異なっているが、三軒ともすべてが洋風の洒落た家だった。その一番奥の家に親子は確かに入って行った。

白壁の真新しい二階建ての家の前には、ちいさな庭があり、そのとなりには補助輪のついたこども用の青い自転車がとまっている。

表札にはOGATAとローマ字で書かれていた。凜子の胸は高鳴った。この家のなかに佑介がいるのだろうか。リビングのソファでくつろぎ、帰宅した母子を笑顔で迎えているのだろうか。

ドアも窓も閉め切っているように見えた家から

は、誰の声もしなかつた。ただ、ホームドラマに出てくるような穏やかな家族の肖像だけが、凜子の頭をよぎった。

凜子は無意識のうちに、車を門の近くまで寄せていた。OGATAと書かれた表札の下にはちいさな木の板がかけられており、佑介、沙希、海斗と横に並べて手書きしてあつた。

海斗のあとには、十分な空白があり、きつところのスペースには近い将来、新しい名前が書き添えられるのであろうと想像した。

にぎっているハンドルが急に重く感じられ、脱力が再び凜子を襲う。

温かみのある木の扉、庭を彩るチューリップやパンジー、車庫に入れられたミニバン車とベビーカー。見るものすべてがしあわせのシンボルだった。

佑介と過ごしていたときに交わされた、ひとつひとつの会話が脳裏をよぎる。

佑介は、凜子と結婚した時点で、実家を簡単にリフォームし、両親とともに暮らすと言つてはいなかつたか。殺風景な佑介のアパートに観葉植物

を飾ろうとしたとき、花や植物は嫌いだから持ち帰ってくれ、と言っではいなかったか。所帯じみているから俺は家庭を持って、ミニバンなんかには絶対に乗らないぜ、と言いつつ切ったのはどこの誰だっただろう。

人はこんなにも変わるものなのだろうか。

彼を変えた人がいるのだとしたら、それは彼の妻だろうか、それとも子どもだろうか。

(以上7月18日放送分)